

I 研究の内容

1 研究主題

「子どもが自ら学び、表現し、考える力を高める指導法の工夫」

2 主題設定の理由

本校においては、学力調査等の状況から国語力に課題があることが浮き彫りにされている。国語はもとより、他教科における書かれていることの実理解ができなければ、内容理解が困難となる。また、課題を解決する場面においても、その意図を読み取ることができなければ、正しく行動することが難しくなってしまう。このように、国語力は、全教科におけるベースとなる力である。そこで、国語力に焦点をあて、研究を進めることが本校の学力向上に直結すると考えられる。

3 研究仮説

児童が、根拠をもって思考し、判断し、たがいに表現する場を意図的にしくみ繰り返し指導することで、小集団の中でも多様な考えにふれることができ、考える力を身につけ高めていくことができるだろう。

4 研究の内容

(1) 英語科における評価の検証

「発達段階や児童の意欲・興味関心などに即しているか」「社会の課題・今後の課題と照らして望ましいか」等について英語担当を中心として進めていく。

(2) 学力向上にかかわる内容

国語力を中心に学力向上のための指導法の工夫について、実践していく。

5 研究の方法

(1) 全体研究会

研究をすすめるにおいて全体会をもち、共通理解を得る上で研究を進める

(2) 研究授業

ア ブロック研究授業

全体での研究会を行い研究授業を年間2本、ブロック内1本の授業公開を実施。

イ 一人一実践授業

校内研のテーマにあった授業を一人一回提供する。

(3) 校内研修

効果のあった方法や工夫などを互いに提示する。

(4) 学校全体での取り組み

家庭学習推進として、家庭へのおたより「岩手っこ」の発行を行う。

II 成果と課題

1 成果

- (1) めざしていく授業の授業像を共有できたことが大きな成果である。特に、高学年の授業でめざす授業像が確認できると、そこへ向けてそれぞれの学年でどんなことができればいいのかを考えられる。この点で大きな前進があった。
- (2) 二本の研究授業や一人一実践の授業の研究により、研究仮説を確かめることができたと思う。少人数学級だが、仮説のような指導を繰り返すことで、子ども達は、根拠を持って思考し、判断し、互いに伝え合うことができるようになった。また、友達の考えに触れることで、自分の考えを広め、深めることができるようになってきた。つけた力を他教科でも発揮している。
- (3) 主題に迫る具体的な授業のスタイルの共通理解が図れ、根拠をもって考えさせるための授業を仕組もうと常に考えることができた。
- (4) 学習規律について、全校で確認しあい、「話し方・聞き方のプロ」については、教室掲示して意識を高められた。
- (5) 家庭との連携として「岩手っこ」便りを発行でき、教師自身も子どもへの接し方、指導の方法などを考えることができた。

2 課題

- (1) 今年度の課題を継続して研究に取り組むことが必要である。
- (2) 小規模校における個と全体とのかかわりの中での討論的な授業の仕組み方を研究し、児童の力を引き続き伸ばしていく。
- (3) 家庭での学習環境・保護者の協力を得るための取り組みの必要がある。

III 成果物

1 授業実践指導案及び記録（※印は全体研究授業・他はブロック研究授業）

- (1) 1学年 ----- 国語「じどう車くらべ」 ----- 小野真理子教諭
- (2) 2学年 ----- 国語「わたしはおねえさん」※ ----- 山宮将仁教諭
- (3) 3学年 ----- 国語「三年とうげ」 ----- 関口若子教諭
- (4) 4学年 ----- 国語「一つの花」 ----- 雨宮久教諭
- (5) 5学年 ----- 国語「大造じいさんとガン」※ ----- 竹川きよみ教諭
- (6) 5学年 ----- 理科「溶解」 ----- 飯久保一男教頭
- (7) 6学年 ----- 英語「行ってみたい国を紹介しよう」 飯室林教諭
- (8) おおぞら教室 - 国語「漢字の広場」 ----- 津野千尋教諭
- (9) さくらんぼ教室 国語「漢字の広場2」 ----- 武井敏江教諭

2 家庭への通信「岩手っ子」内容

- | | |
|-------------|--------------|
| 1号 生活リズム | 6号 子どもの睡眠 |
| 2号 親子でスマホ教室 | 7号 お手伝いで学力UP |
| 3号 アウトメディア | 8号 脳科学と学習 |
| 4号 生活習慣 朝食 | 9号 学習意欲・家庭学習 |
| 5号 ほめ方・しかり方 | 10号 親子の時間 |